

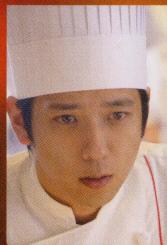
彼は、情熱を失ってしまった孤独な天才料理人。

2000年代初頭、現代——
歴史に消えた伝説のフルコースを再現せよ。

依頼人の「人生最後に食べたい料理」を再現して高額報酬を得る、通称=最期の料理人・佐々木充。彼はすべての味を記憶し再現することのできる、絶対味覚=“麒麟の舌”の持ち主である。幼少時に両親を亡くした充は、同じ境遇の柳沢健とともに施設で育ち、自らの才能を頼りに起業。しかし経営に失敗して多額の借金を抱え込み、いまや料理への情熱も失いつつあった。そんなとき、巨額の依頼が舞い込んできた。依頼人の名は楊 晴明。世界各国のVIPが彼の料理を食べに来るといふ、中国料理界の重鎮。楊の依頼とは、かつて満洲国で日本人料理人・山形直太郎が考案したという、伝説のフルコース[大日本帝国食全席]のレシピの再現であった。楊は、かつて山形の調理助手としてメニュー作成に協力していたが、太平洋戦争開戦によって消息を絶った山形とともにレシピ集も散逸されたというのである。そして驚くべきことに、山形もまた充と同じ絶対味覚の才能を持っていたという。太平洋戦争開戦直前の満洲国で、山形の身に何が起きたのか…？ なぜ料理は発表されないまま歴史の闇に消えてしまったのか…？ 70年の時を超えて、充は、真実へと辿りつくことができるのだろうか。



〈現代〉



佐々木 充

(二宮和也)

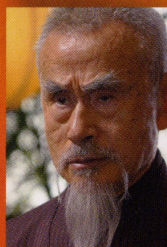
一度食べた味を完全再現できる、絶対味覚=“麒麟の舌”の持ち主。依頼人が「人生最後に食べたい料理」を再現して高額報酬を得る、通称=最期の料理人。幼少時に両親を亡くして以来、施設で育ち、自らの才能だけを頼りに生きてきた。料理人に感情は不要、技術の研鑽こそ真髄という信念を持っており、他人に心を開かない。



柳沢 健

(綾野 剛)

充の唯一無二の理解者。大衆中華料理店の雇われ店長として生計を立てている。幼少期に親に棄てられた過去を持ち、充と同じ施設で兄弟同然に育ってきた健は、充の才能の最初の発見者でもある。口は悪いが、根は優しく情にもろい。料理への情熱を失ってしまった充を心配して、なにかとおせっかいを焼く。



楊 晴明

(笈田 ヨシ)

世界各国のVIPが彼の料理を食べに来るといふ、中国料理界の重鎮。どんな料理も再現できる充に[大日本帝国食全席]の復元を依頼する。楊は1930年代、満洲で山形直太郎の調理助手としてメニュー作成に協力したが、消息を絶った直太郎とともにレシピ集も散逸されたという…。

人物紹介

本作では2000年代初頭と1930年代、二つの時代が並行して語られる。現代パートは、絶対味覚=“麒麟の舌”を持ちながらも料理への情熱を失ってしまった主人公・佐々木充が、関係者たちの証言を集めながら「消えたレシピ」の解明に挑むミステリアスな展開。そして過去パートは、太平洋戦争直前の1930年代を舞台に、レシピ作成に人生を捧げた、もう一人の麒麟の舌を持つ料理人・山形直太郎と、彼の信念を支え続けた人々の運命を描きだす。

現代と戦前。二つの時代に現れた、二人の天才料理人。

ラストレシピ——それは、失われた70年をつなぐ、壮大な愛のメッセージ。

〈1930年代〉

山形直太郎

(西島秀俊)

絶対味覚=“麒麟の舌”を持つ料理人。元・天皇の料理番として宮内省に勤めていたが、[大日本帝国食全席]作成のため、満洲に渡る。メニュー開発をすすめるうちに、日本と他国の料理を融合して新たなレシピを生み出すことが、民族間の相互理解の助けとなり「料理をもって和を成せる」という考えに至る。その理想に人生すべてを捧げることとなるが、太平洋戦争開戦直前に、レシピ集とともに消息を絶った。



山形千鶴

(宮崎あおい)

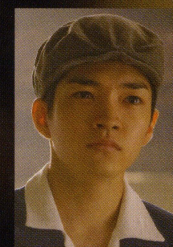
直太郎の妻。直太郎と一緒に満洲に渡り、公私ともに夫をサポートする。優しさだけでなく、行動力も兼ね備えており、レシピ集の作成にも積極的に協力する。メニュー作りに没頭するあまり、周囲から孤立する直太郎を支え続けるのだが…。



鎌田正太郎

(西畑大吾)

直太郎の調理助手として雇われた若き料理人。戦時下の混乱で直太郎が消息を絶つ前に、最後に会っていた人物。料理の腕は見習いレベルだったが、直太郎に師事するうちに彼の料理と理想に感銘を受け、修行に打ち込んでいく。やがて現代と過去をつなぐ、ある重要な役割を担うことになる。



三宅太蔵

(竹野内豊)

満洲国ハルビン関東軍司令部に籍を置く、大日本帝国陸軍大佐(のち少将)。直太郎を満洲に招聘し、清朝の宮廷料理として世界にその名を轟かせる「満漢全席」を超えるフルコース料理、[大日本帝国食全席]の献立作成を命じる。その目的は日本の威信を諸外国に示すことであり、目的遂行のためには手段の是非は問わないという、極端に国益重視かつ結果主義な思想を持っている。



彼は、愛に人生を捧げた悲運の天才料理人。

1930年代、満洲国——
満漢全席を超える、究極の日本料理を開発せよ。

天皇の料理番・山形直太郎は国命を受けて、究極の日本料理フルコース[大日本帝国食全席]のメニュー開発のため、妻・千鶴とともに満洲国に移住する。現地での助手は満洲人の楊晴明と、日本人青年の鎌田正太郎。たった4人で満漢全席を超える料理を考案できるのだろうか…。

しかし、山形には特殊ともいえる才能があった。一度食べた味を記憶し再現できる、絶対味覚=“麒麟の舌”。世界中の食材が集まる満洲で、山形の才能は大きく開花していく。やがて山形は、日本と他国の料理を融合して新たなレシピを生み出すことが民族間の相互理解の助けとなり、料理で和を成すことができると考えるようになり、これまで以上にメニュー開発に没頭していく。愛する家族のことも顧みず…。そんなとき、ハルビン関東軍司令部の陸軍大佐・三宅太蔵から、満洲国への天皇行幸が決定したという知らせを受ける。その晩餐会で、[大日本帝国食全席]をお披露目するのだ。しかしその裏には、戦争へと傾倒する日本軍部が画策した、巨大な陰謀が渦巻いていた。それに気付いた山形は、レシピにあるメッセージを遺そうとするのだが…。

